15　　尼の信仰心 　　　　　　　　　　　　　　　　　助詞①　格助詞

ちかき比、伊勢の国にある山中に柴の庵結びて、痩せおとろへて、顔よりはじめて手足まことにきたなき尼の、涙を流して念仏する侍り。深く思ひ入らむ人とは見ゆれども、あまりに顔よりはじめてきたなくおはするは、「いかに、さまではあらアじぞや」と人々言ひければ、「さうなり。さぞきたなくⅠ思すらむ。されども、様もなだらかにＡならば、そぞろＢなること言ひて、本意Ｃならぬことも侍るイべし。されば、わざと身をやつすウに侍り。つねに涙のこぼるることは、生死のおそろしさに、いかがと覚えて、流るるに侍り」と言ひエけり。まことに、夜昼念仏のこゑ怠ること侍らねば、人々もまことの後世者とこそとて、貴みて、かたのごとくの命を支ゆるわざをば、里人Ⅱとぶらひきこえけり。

【本文チェック】

①　ア～エの助動詞の、文法的意味・文中での活用形を〔　〕に書きなさい。

ア〔　　　　　　　・　　　　形〕　イ〔　　　　　・　　　　形〕

ウ〔　　　　　・　　　　形〕　　　エ〔　　　　　・　　　　形〕

②傍線部Ⅰ・Ⅱを現代語訳し、（　）に書きなさい。

Ⅰ（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

Ⅱ（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

③□Ａ～Ｃの「なら」「なる」は、Ｘ動詞・Ｙ形容動詞の一部・Ｚ助動詞のどれか。それぞれ【　】に記号で書きなさい。

Ａ【　　　】　Ｂ【　　　】　Ｃ【　　　】

【語彙力 ✚】

問１　次の語句の意味について、空欄を埋めよ。＊〔数字〕はノート本冊での本文の行数を表す。

１　本意〔４〕　　　（　　　　　　　　）

２　やつす〔５〕　　①目立たない格好にする

　　　　　　　　　　②（　　　　　　　　　）

問２　次の傍線部の意味として最も適当なものを選べ。

１　冬など月かき夜は、そぞろに心なき心も澄み、情けなき姿も忘れられて、

（無名草子）

ア　徒歩で　　　　イ　わけもなく

ウ　しみじみと　　エ　いつのまにか

（　　　）

２　「北山になむ、なにがし寺といふ所にかしこき行ひ人はべる」（源氏物語）

ア　参上する　　　　イ　いらっしゃる

ウ　お呼びになる　　エ　おります

　　（　　　）

【文法力 ✚】

問３　次の傍線部の意味用法として適当なものを、後から選べ。

１　小さき板屋①の、黒うきたなげなる②が、雨に濡れたる。（枕草子）

①（　　　）　　②（　　　）

２　ありさりてもはむと思へこそ露の命もぎつつ渡れ（万葉集）

（　　　）

ア　主格　　イ　連体修飾格　　ウ　体言の代用

エ　同格　　オ　比喩

問４　次の傍線部の説明として適当なものを、後から選べ。

１　わが身は次にして、人をいたはしく思ふあひだに、（方丈記）

（　　　）

２　岩に、指の血して書きつけける。（伊勢物語）

（　　　）

ア　サ変動詞＋接続助詞「て」　　イ　格助詞「して」

問５　次の傍線部を現代語訳せよ。

１　ただ一人、よりまうでけり。（徒然草）

（　　　　　　　　　　　）

２　、を御使ひにて、平泉へ遣はせける。（義経記）

（　　　　　　　　　　　）

３　声ある人してうたはせたまふ。（源氏物語）

（　　　　　　　　　　　）

４　この歌はある人のいはく、がなりと。　（古今集）

（　　　　　　　　　　　　　）

【探究】発展的に考えてみよう

問６　尼の求道心について、文章全体を踏まえて、わかりやすい表現でまとめよう。

〔

〕

【解答】

【本文チェック】

①　ア＝打消推量・終止　イ＝推量・終止　ウ＝断定・連用　エ＝過去・終止

②　Ⅰ＝お思いになっているだろう　Ⅱ＝訪ね申し上げた

③　Ａ＝Ｘ　Ｂ＝Ｙ　Ｃ＝Ｚ

問１　１＝（出家の）念願　２＝出家姿にする

問２　１＝イ　２＝エ

問３　１　①＝エ　②＝ア　２＝オ

問４　１＝ア　２＝イ

問５　１＝徒歩で　　　　　　　２＝お使いとして

　　　３＝人に（人を使って）　４＝柿本人麿のものだ

問６　観点　仏道修行に一心に励もうというかねてからの願いを遂げるため、わざと身なりをみすぼらしくし、生死の恐ろしさに涙を流して途切れることなく念仏する尼の、激しく熱心な求道心を捉えていること。

【現代語訳】

問２　１　冬など月の明るい夜は、わけもなく情趣を理解しない心も清らかになり、風情のない姿も忘れられて、

２　「北山で、何々寺という所に尊い修行僧がおります」

問３　１　小さい板屋で、黒く汚れている感じの板屋が、雨に濡れている。

２　そのうちに後で逢えると思えばこそ、露のようなはかない命もつなぎながら生

きているのです。

問４　１　我が身（のこと）は次にして、人をかわいそうに思うので、

２　岩に、（手の）指の血でもって書きつけた。

問５　１　ただ一人、徒歩でお参りした。

２　亀井と伊勢の二人をお使いとして、平泉へ行かせた。

３　声のよい人に歌わせなさる。

４　この歌はある人が言うことには、柿本人麿のものだと。